

# 談話におけるヲ格無助詞文の述語に関する考察

荏宿 紀子

【キーワード】動詞 意味役割 対象 語種 雑談

## 1. はじめに

雑談のようなくだけた日常会話において、名詞と動詞が直接結びつく「無助詞」という現象がしばしばみられることが、すでに先行研究でも述べられている。先行研究では、「動詞からの要求度」<sup>(1)</sup>、「名詞の有生性」<sup>(2)</sup>、「文の類型」<sup>(3)</sup>、「主題性と語順」<sup>(4)</sup>などの観点から、「無助詞」について考察されているが、助詞の使用の可否には、種類の要因が関わっており、「無助詞」になる条件は未だ明らかになっていないようである。助詞「ヲ」の省略に関しては、名詞句の分析が主で、述語句の分析はあまりなされていない。しかし、述語の種類によっても、無助詞名詞との結びつきやすさに違いがあると考えられる。

従って、本稿では、述語と名詞の意味関係に着目し、助詞「ヲ」を要求する述語の中で、どのような意味役割の格をとる述語のときに「無助詞」という現象が頻繁に起こっているのかを探ることとする。また、個々の述語別にみると、どのような述語のときに「無助詞」という現象が頻出するのか、考察する。

## 2. 先行研究

助詞「ヲ」の省略に関して、動詞との関係で考察された先行研究に丸山（1995）がある。丸山（1995）では、話しことばを資料とし、述語の結合価情報を用いて、無助詞格成分がどのような格に立っているかを調査している。丸山（1995）は結合価情報から格関係を認定しているため、表層格に関する考察といえる。丸山（1995）によると、無助詞格成分の格は、動詞により強く求められている格である確率が高い。中核的な格ガ・ヲ・ニのうち、ヲが最も動詞からの要求度が高く、無助詞格成分の格もヲ格であることが多い。ヲ格の中では、＜出どころ＞を示すヲは一般の＜対象＞を示すヲよりは要求度が低いという。

丸山（1995）では、「動詞からの要求度」という観点から考察されているものの、ヲ格の中での違いに関しては、＜出どころ＞と＜対象＞を表すものの違いについて簡単に触れられているのみである。

ヲ格で対象を表す動詞はかなり幅広くあるので、本稿では、ヲ格で表される＜対象＞について、さらに詳しく考察する。

### 3. 調査にあたって

#### 3.1. 調査の対象

本稿で調査の対象としたのは、助詞「ヲ」が担う格関係にある名詞と動詞の結びつきである。つまり、「無助詞」で表現されている用例に助詞を入れるとしたら、「ヲ」であるのか「ハ」であるのかということは問わず、ヲ格をすべて用例としている。それは、話しことばにおいて、「ヲ」の省略か、「ハ」の省略かというのは微妙な違いであり、判断が極めて難しいからである。名詞と動詞の結びつきからヲ格を判断し、ヲ格の「無助詞」と認定して用例を採集した。「無助詞」については本稿の用例の中では「Φ」を用いて表す。<sup>(5)</sup>

なお、本稿の調査では、ヲ格と考えられる名詞でも、述語が省略されて資料上に現れなかったものは、対象外とした。

漢語サ変動詞については「数学を勉強する」、「数学勉強する」の場合、「数学」と「勉強する」のような関係は例として採集した。しかし、「勉強する」の「勉強」と「する」との関係は例として採集しなかった。

また、「裏をかく」や「気をつける」「風邪をひく」のような、ヲ格を用いていても動詞の意味が弱く、格の分類にあてはまらない表現や、「～を逆手にとる」のようなヲ格を要求する慣用的なまとまりについても、対象外とした。

#### 3.2. 調査資料

本稿の調査資料として以下の談話の書き起こし資料を用いた。

現代日本語研究会（1999）『女性のことば・職場編』ひつじ書房

談話資料の雑談 6500 発話

現代日本語研究会（2002）『男性のことば・職場編』ひつじ書房

談話資料の雑談 4967 発話

この資料で「雑談」となっているのは、資料作成に協力した談話の提供者が自己申告したものである。この資料から、ヲ格の無助詞 495 例と、助詞「ヲ」 236 例、計 731 例を採集した。資料中の記号で、本調査の内容と関わりのない記号は、紙幅の都合もあり筆者の判断で外した。用例末尾の〔 〕内は、出典を表す。「女」は『女性のことば』、「男」は『男性のことば』、番号はそれぞれの資料の発話番号である。<sup>(6)</sup>

## 4. 格の意味役割による分類

### 4.1. 分類方法

国語研（1997）、（2004）を参考に、ヲ格を八通りの意味役割にわけ、その中でも「対象」を表すものについては、十四通りに分けて分析した。

国語研（1997）は、名詞と述語の意味関係について、その構文上の関係である「表層格」と、意味上の関係である「深層格」との対応関係を記述したものである。ただし、はだか格（本稿での無助詞）は、表層格の一つとして格助詞と同列に扱うべきであるが、用語総覧データが使えないため、調査の対象にしなかったとある。従って、無助詞の深層格については、述べられていない。国語研（1997）では、ヲ格を以下の十五種類の意味役割に分けている。

動作主、経験主、対象、相手2、時、時一始点、時間、場所、場所一始点、場所一終点、場所一経過、終状態、属性、範囲規定、比較の基準  
上記の十五種類のうち、経験主、時、時一始点、場所一終点、比較の基準については、本調査では用例がなかった。

相手2とは「避ける」「免れる」などのヲ格に与える意味役割だが、国語研（1997）の本文に「ヲ格にこれを用いることにはいささか疑念がある」、「単純に＜対象＞とするか」という迷いの記述がある。本調査では「ラッシュ避ける」という2例のみしか出現しなかった上、対象に分類しても問題ないと考え、この2例を対象に分類し、相手2という意味役割をたてなかった。

終状態とは動詞「作る」「成す」などで表され、単純に「作り出す」の意ではなく、「筏が列を作って」のようにガ格とヲ格の実体が重なる場合の意味役割だという。本調査では「行列作る」という1例のみしか出現しなかったため、これも対象に分類し終状態という意味役割をたてなかった。

その結果、本稿ではヲ格を対象、動作主、時間、場所、場所一始点、場所一経過、属性、範囲規定の八通りの意味役割に分類した。しかし、ヲ格は対象を表す例が多く、本調査で採集した全用例731例中698例が対象に分類された。従って、国語研（2004）の分類番号をもとに、対象をさらに十四通りに分類して考察した。名詞と動詞の意味関係でまず分け、そのあと動詞の意味でさらに分類しているため、「見る」「掛ける」「持つ」「取る」「送る」「聞く」など複数の意味を持つ動詞は、意味によって別の分類項目に入れている。本稿でのヲ格の分類の結果が【表1】である。(7)

本稿では名詞と述語が直接結びつく「無助詞」の場合と、助詞「ヲ」を使って名詞と述語がつながる場合との用例数を比較して、どのような

述語が「無助詞」で名詞をとりやすいのか、その傾向を探ることを目的としている。そのため、「Φ」と「ヲ」との用例の合計があまりに少ない分類項目に関しては、名詞と述語の結びつきの用例を挙げるにとどめ、「Φ」と「ヲ」との用例が合計 20 例以上採集できたもののみに関して考察する。(8)

【表1】

意味役割	項目 1	項目 2	Φ		を		総計
対象	2. 11類	—	1	25%	3	75%	4
	2. 12存在	—	20	77%	6	23%	26
	2. 15作用	0	8	73%	3	27%	11
		1・2	6	46%	7	54%	13
		3	12	48%	13	52%	25
		4・5・6	17	53%	15	47%	32
		7	3	17%	15	83%	18
		8	1	25%	3	75%	4
		集計	47	46%	56	54%	103
	2. 30心3. 30心	0・1・2・4	8	73%	3	27%	11
		5・6	19	59%	13	41%	32
		9	39	74%	14	26%	53
		集計	66	69%	30	31%	96
	2. 31言語	0・1・2・3・4	30	63%	18	38%	48
		5	24	83%	5	17%	29
		集計	54	70%	23	30%	77
	2. 32芸術	—	6	67%	3	33%	9
	2. 33生活	3	58	79%	15	21%	73
		7・9	17	68%	8	32%	25
		集計	75	77%	23	23%	98
	2. 34行為	—	50	64%	28	36%	78
	2. 35交わり	—	5	63%	3	38%	8
	2. 36待遇	—	11	73%	4	27%	15
	2. 37経済	0	39	85%	7	15%	46
		1・6	40	87%	6	13%	46
		7・8	19	76%	6	24%	25
		集計	98	84%	19	16%	117
	2. 38事業	0・1・2・3・4	19	73%	7	27%	26
		5	18	58%	13	42%	31
		集計	37	65%	20	35%	57
	2. 57生命	—	2	100%	0	0%	2
	その他	—	5	63%	3	38%	8
	対象集計		477	68%	221	32%	698
動作主	2. 36待遇	—	1	100%	0	0%	1
時間	2. 15作用2. 16時間	—	2	100%	0	0%	2
場所	2. 38事業	—	0	0%	1	100%	1
場所一始点	2. 15作用	—	2	100%	0	0%	2
場所一経過	2. 15作用	—	11	58%	8	42%	19
属性	2. 13様相	—	2	67%	1	33%	3
範囲規定	2. 30心	—	0	0%	5	100%	5
	総計		495	68%	236	32%	731

#### 4. 2. 用例と考察

はじめに対象についての用例を挙げ、特徴的な例について考察する。

[例 1] (対象 2. 11) いや、あの一、そのワインの牛久シャトーだけは観光地、と一、そのぶどうのあれを兼ねてたんですよ、ぶどう園とワインのじょ、ぞーぞー、ぞー、醸造所と一。 [男 9061]

「2. 11 類」には他に「コードをつなぐ」などの例を分類した。

[例 2] (対象 2. 12) これうえっかわΦ残しときゃいいんだよ。 [男 2853]

「2. 12 存在」には「ここあける」「それをすてる」「条件出す」などの例があった。

[例 3] (対象 2. 153) かつおぶしとか、醤油Φ入れて、で、こー、こうなんか、つゆΦ入れて、でつけて食べんの↑ [男 745]

[例 4] (対象 2. 153) これ、じゃあイヤホンジャックを差し込んだらあ、自然にスピーカーから音は出なくなるのかしら。 [女 11080]

対象の中でも「2. 15 作用」は無助詞が 46%であった。本調査で集めた全用例 731 例のうち、68%に当たる 495 例が無助詞であったことを考えると、無助詞名詞の出現率が低かった。<sup>(9)</sup>

この項目に分類された主な動詞は「入れる」「付ける」である。この項目の全用例 59 例中 27 例を占めている。「入れる」「付ける」だけで考えると、27 例中 17 例が無助詞であり、63%である。「入れる」が無助詞で名詞と結びつく場合で多いのは「醤油入れる」「砂糖入れる」「お酢入れる」など調味料を何かに入れるときの表現であり、「入れる」で無助詞の例 11 例中 7 例がこのタイプであった。「付ける」の無助詞の例 6 例のうち 3 例は、「電気付ける」「ラジオ付ける」など電化製品を付けるという意味であった。無助詞名詞の出現率が低い項目の中でも、名詞と動詞の結びつきが固定的な例に関しては、無助詞名詞の出現率が低くなかった。

しかし、「2. 15 作用」に分類した 103 例中 69 例の動詞が「場所」、「場所一終点」「終状態」<sup>(10)</sup>の二格の要素をとりうる動詞であった。<sup>(11)</sup>「～に～を入れる」「～に～を付ける」もその動詞であるが、他には「～に～を動かす」「～に～を置く」、「～を～に変える」などの動詞である。

場所を表す「ニ」は「二格」の中でも無助詞になりうる「ニ」である。

<sup>(12)</sup> この二格をとる動詞のヲ格の無助詞の割合が低いのは、場所を示す二格の要素との混乱をさけるためではないかと考えられる。本調査でも、二格の要素が共に出現した例では 14 例中 10 例で「ヲ」が使われていた。

[例 5] (対象 2. 309) なんかあれ、こないだひよってテレビΦ見てたら、牛久ってさー、ワイン、ワインのなに↑、城みたいなのあるんだって↑ [男 9055]

「2.30 心」のうち、「2.309」は「聞く」「見る」という動詞がほとんどである。「2.309」以外の「2.300」「2.301」「2.302」「2.305」「2.306」には「意識する」「喜ぶ」「選ぶ」「思い出す」「考える」「知る」「忘れる」などの動詞が含まれている。

[例 6] (対象 2.315) 最近小説Φ読んでないなあ、しかし全然、んん。

〔女 3128〕

「2.31 言語」のうち、「2.315」は 83%が無助詞の例であった。「2.315」に分類された動詞は「書く」「読む」「(新聞見る、など読む意味の) 見る」の三動詞のみである。これらは、「名前書く」「新聞見る」「小説読む」などの組み合わせで無助詞名詞が出現している。

[例 7] (対象 2.32) とりあえずー、きのういっしょうけんめいベースΦ弾いてた。

〔男 10394〕

「2.32 芸術」には他に「歌歌う」「絵を描く」などの例があった。

[例 8] (対象 2.333) 東京バナナΦ食べましたよ、わたし。〔男 6469〕

「2.33 生活」のうち「2.333」に分類される例も 73 例中 79%にあたる 58 例が無助詞であり、無助詞名詞の出現率が高いといえる。「2.333」に分類された動詞を見てみると「食べる」「飲む」がその多くを占め、その他に「着る」「(スカートを) 穿く」「食う」などがあった。

[例 9] (対象 2.34) うん、ワゴンセールΦやってたからさ、あー。〔男 1142〕

「2.34 行為」には主に「する」や「やる」という動詞を分類した。「2.34 行為」の用例 78 例中 58 例は「やる」の例である。「やる」のみでは 58 例中 41 例の 71%が無助詞であった。「やる」には「ストレッチやる」「家事やる」「交流やる」「それやる」など、様々な名詞が結びついていた。

[例 10] (対象 2.35) わたし、個人でもけっこう友達Φ紹介したりねー、いろいろ、貢献してるんだから。

〔女 10221〕

「2.35 交わり」には「お客さんを招く」「子ども送る」などの例があった。

[例 11] (対象 2.36) 英語Φ教えてほしいし、なんか、英語できる人とか来たら、英会話とか。

〔女 6304〕

「2.36 待遇」には「教える」「頼む」「(教えるという意味の) 見る」等の動詞を分類した。

[例 12] (対象 2.370) [名字] さんが荷台もってがらがらがらがら、歩いている、なんの荷物Φ取りに行くのかと思ったら。〔女 6964〕

[例 13] (対象 2.376) 誤解なのよ、あなた、お弁当Φ買って来ることぐらい誰でもたいしたことないじゃん、ぜんぜん。〔女 7319〕

「2.37 経済」に関しては、この項目全体で 117 例中 98 例の 84%が無助詞の例であった。「2.370」には主に「取る」「持つ」が分類されてい

る。「2.370」の全体で 46 例中 29 例が「取る」の例でそのうち 27 例が無助詞である。「これ取る」「夏休み取る」「単位取る」など自分のものとして獲得するという意味の「取る」だが、名詞は様々である。「取る」の場合は、決まった組み合わせにはなっていなかった。

「2.376」には主に「買う」が分類されている。その他には「売る」「(指定席を取る、などの結果的に買うという意味になる) 取る」である。「買う」も「取る」と同様に結びつく名詞は様々である。「お弁当買う」「チケット買う」「写真集買う」などの例があった。

「取る」や「買う」は無助詞で名詞と動詞が結びつく表現が安定しており、「取る」や「買う」に結びつく無助詞名詞が他の格関係として認識されることは少ないためと考えられる。

[例 14] (対象 2.38) こっちで卵 $\Phi$ つかってるからさー、こっちにほかの卵がないんだよ。 [女 5661]

「2.38 事業」に分類した主な動詞は「使う」「作る」「塗る」「建てる」「取る」「掘る」である。

[例 15] (対象 2.57) 去年の 3 年生、こけたやつが顔 $\Phi$ すりむいてたけど。 [男 9857]

「2.57 生命」の分類できるのは、本調査では[例 15]と、「心痛める」の 2 例のみであった。

[例 16] (対象その他) わりあい、[名字]さんとねー、ぼくでねー、ついうっかりして声 $\Phi$ かけ忘れる、忘れはしないんだけどー、-略- [男 2463]

以下に、対象以外の意味役割について例を挙げる。

[例 17] (動作主) でも、ことし、ことし、かな↑、来年かな、韓国、すごい技師 $\Phi$ 行かせるんでしょう↑ [女 6411]

[例 18] (時間) そーかー、みんなうるおいのある人生 $\Phi$ おくってんじゃん。 [女 143]

[例 19] (場所) それとー、案外事故があったり、イレギュラーがあったとき、すぐにやっぱり、あの一さー、写しとかなないとさー、現場 $\Phi$ を。 [男 3389]

[例 20] (場所-始点) よく今だからー、あの、昨日も[地名]のそこのー、[地名]の交差点 $\Phi$ 降りてですねー、お店何軒もあるじゃないですか↑ [男 3386]

[例 21] (場所-経過) あー、山手線、池袋からー、五反田っていうと、新宿 $\Phi$ 通って渋谷 $\Phi$ 通ってですから、もうたいへん。 [男 6342]

[例 22] (属性) 輪っかじゃないですよ、なんかこう容器のようなこんな形 $\Phi$ してません↑ [女 10711]

[例 23](範囲規定) さっきあたしはなにを調べていたのかわんなくなつてしまった。 [女 4886]

本調査では場所を表す意味役割として「場所」、「場所一始点」、「場所一経過」を表す例が出現した。これらの三用法を合わせると本調査で場所を表す例は 22 例あり、そのうち 13 例が無助詞であり、場所を表す用法の無助詞名詞の出現率は 59% であった。

範囲規定に関しては、本調査では 5 例しか用例がなかったが、5 例とも助詞が使われている例であった。範囲規定というのは、国語研 (1994) では、「争う」「言合う」「研究する」「調べる」などの動詞で、「ヲ」を「について」「をめぐって」などと言い換えられる場合としている。さらに、「科学技術文献においてはこの種のヲが非常に多い」とある。範囲規定に分類されるのは、「雑談」で使うことの少ない「ヲ」であるため、無助詞の例がなかったのかもしれない。これに関しては、用例を増やして、考察したい。

#### 4. 3. まとめ

ここまでの格の意味役割による分類と、動詞の意味の分類から、特に無助詞になりやすいと考えられるのは、対象の意味役割の中では、言語「2.315」(書く、読む、見る)、生活「2.333」(食べる、飲む等)、経済「2.370」(取る、持つ等)、経済「2.376」(買う等)に分類された例であった。ヲ格をとる動詞の中でも日常生活で頻繁に使われると考えられる動詞であった。

一方、無助詞の出現率が低かったのは、「2.15 作用」で、その要因としては「場所」「場所一終点」「終状態」の意味の二格をとりうる動詞が多く分類されていることがあげられ、これらの二格との混同を避けるために、「ヲ」が使われることが多いと考えられた。ただし、「2.15 作用」の中でも、「入れる」「付ける」に関しては、日常的によく使われ、名詞との結びつきが固定的で、ヲ格であることが明白であるような例では、無助詞名詞の出現率が低くなかった。

ヲ格は無助詞になりやすい、とはいっても、意味によって無助詞名詞の出現率に違いがあることがわかった。

### 5. 述語別の分類

#### 5. 1. 語種・種類別の分類

前節までの考察から、無助詞になりやすい動詞は日常的に雑談でよく使われる動詞だと考えられる。前節までの考察では和語の単純動詞と名詞との結びつきで無助詞である例が多かった。動詞の語種・種類による



要因も考えられるため、和語の単純動詞、和語の複合動詞、漢語に分けて考察を試みた。その結果が【表 2】である。(13)

【表2】		和語の単純語			和語の複合語			漢語			総計		
意味役割	項目 1	Φ	を	計	Φ	を	計	Φ	を	計			
対象	2.11類	1	25%	3	75%	4	0	0	0	0	4		
	2.12存在	20	77%	6	23%	26	0	0	0	0	26		
	2.15作用	43	49%	44	51%	87	3	10	13	1	3 103		
	2.30心3.30心	63	71%	26	29%	89	3	1	4	0	3 96		
	2.31言語	53	72%	21	28%	74	0	0	0	1	2 3 77		
	2.32芸術	6	67%	3	33%	9	0	0	0	0	0 9		
	2.33生活	74	77%	22	23%	96	1	1	2	0	0 98		
	2.34行為	50	67%	25	33%	75	0	2	2	0	1 78		
	2.35交わり	3	50%	3	50%	6	0	0	0	2	0 2 8		
	2.36待遇	11	79%	3	21%	14	0	0	0	0	1 15		
	2.37経済	95	85%	17	15%	112	0	1	1	2	1 3 116		
	2.38事業	34	64%	19	36%	53	0	0	0	2	1 3 56		
	2.57生命	1	100%	0	0%	1	1	0	1	0	0 2		
	その他	3	100%	0	0%	3	2	2	4	0	1 8		
	対象 集計	457	70%	192	30%	649	10	37%	17	63%	27 8 40%	12 60%	20 696
動作主	2.36待遇	1	100%	0	0%	1	0	0	0	0	0 0 1		
時間	2.15作用2.16時間	2	100%	0	0%	2	0	0	0	0	0 0 2		
場所	2.38事業	0	0%	1	100%	1	0	0	0	0	0 0 1		
場所—始点	2.15作用	2	100%	0	0%	2	0	0	0	0	0 0 2		
場所—経過	2.15作用	9	60%	6	40%	15	0	1	1	2	1 3 19		
属性	2.13様相	2	67%	1	33%	3	0	0	0	0	0 0 3		
範囲規定	2.30心	0	0%	2	100%	2	0	2	2	0	1 1 5		
総計		473	70%	202	30%	675	10	33%	20	67%	30 10 42%	14 58%	24 729

【表 2】から和語の単純動詞は 675 例中 70%にあたる 473 例が無助詞であった。一方、和語の複合動詞は、30 例中 10 例のみが無助詞で、33%の割合である。また、漢語動詞も 24 例中 10 例のみが無助詞で 42%の割合である。和語の単純動詞に比べ、和語の複合動詞、漢語動詞は無助詞の割合が低かった。

和語の複合動詞を項目別にみると、「2.15 作用」に 13 例が分類されており、「2.15 作用」の無助詞の割合が低いことの一因と考えられる。しかし、和語の単純動詞だけを見ても、「2.15 作用」は無助詞が 49%となっており、やはり「2.15 作用」に関しては、無助詞で名詞と動詞が結びつく例が少ない。これらの結果から、無助詞になる主たる要因は動詞の意味であるが、動詞が和語か漢語か、単純動詞か複合動詞かということも無助詞になる条件に関わっているといえる。動詞の中では和語の単純動詞が最も無助詞名詞と結びつきやすいことがわかった。(14)

## 5.2. 動詞別の傾向

本調査で「Φ」と「ヲ」とを合わせて 20 例以上の用例があった動詞について考察する。(15) 一つの動詞が複数の意味で使われている場合は、意味ごとに分けて用例数を数えた。その結果が【表 3】である。

【表3】				Φ		を		計
見る	対象	2.30心	9	28	74%	10	26%	38
言う	対象	2.31言語	0	24	77%	7	23%	31
食べる	対象	2.33生活	3	32	78%	9	22%	41
やる	対象	2.34行為	3	41	71%	17	29%	58
取る	対象	2.37経済	0	27	93%	2	7%	29
買う	対象	2.37経済	6	27	90%	3	10%	30
計				179	79%	48	21%	227

【表3】から本調査で他の動詞と比べて頻出する動詞は、無助詞の出現率が高いことがわかる。特に物のやりとりの意味が含まれる「2.37 経済」の項目に入っている動詞は「取る」が93%、「買う」が90%であり、ほとんどの例が無助詞の例であった。和語の単純動詞の中でも、「取る」「買う」に関しては、無助詞で名詞と動詞が結びつく例が非常に多いといえる。

### 5.3. まとめ

五節では、四節の補足として、和語の単純動詞は、和語の複合動詞や漢語動詞と比べて、無助詞名詞の出現率が高いことを確認した。また、動詞別にみると、「2.37 経済」に分類される「取る」「買う」が無助詞名詞と結びつくことが多いとわかった。

## 6. おわりに

本調査では、無助詞の深層格を認定し、その中で無助詞名詞の出現率を調べた。しかし、格の意味役割の中で「対象」に関して考えてみても、ヲ格だけではなく、ガ格でもニ格でも「対象」を表すことがある。無助詞の条件に関わるのが、深層格なのか表層格なのか、他のガ格、ニ格とも関連させながら、今後考察していきたい。

また、本調査では、名詞と動詞の結びつきだけで考察したが、当該発話からは意味が取りにくい例でも助詞が使われない例もあった。例えば、「あー、英語の先生Φやった。」〔女 6259〕は、当該の一発話だけを見ると、「(誰かが) 英語の先生をやった」とも「(何かを) 英語の先生がやった」とも考えられるのである。この例の前では、ある人の話をしている、その人の名前を思い出そうとしている。その人が「英語の先生をやっていた」ということを言っているの、前の会話からの流れで、ヲ格だとわかるのである。

このように、意味役割についても、一発話単位ではわからないこともあり、談話レベルで考えなければならないことも多い。それらは今後の課題としたい。

【注】

- (1) 丸山(1995) (2) 皆島 (1993) (3) 黒崎 (2003) (4) 丹羽 (1989)
- (5) 先行研究では、無助詞名詞が文頭にあり主題としてとりたてられているか、文中深くにあるかで、無助詞の意味・機能が違うことが述べられている。また、無助詞名詞が文頭にある場合、無助詞になる格関係に制約がなくなることと述べられている。しかし、ヲ格が担う意味役割は、どの意味役割でも無助詞になること、本稿では無助詞の機能に関しては考察していないことから、無助詞名詞が文頭か、文中かという観点では分析の対象にしていない。無助詞の意味・機能に関する考察は今後の課題としたい。
- (6) ヲ格の無助詞文の述語を考察するにあたって、国立国語研究所（以下、国語研）(2004)『日本語話し言葉コーパス』の自由対話に関しても調査を行った。このコーパスの自由対話は『女性のことば』、『男性のことば』の雑談とは質の違うものとなっている。『話し言葉コーパス』の自由対話は、一人が質問をしてもう一人がそれに答える形式になっており、また、普段からよく話す親しい人同士の対話とは考えにくい。調査の結果、『話し言葉コーパス』は、『女性のことば』、『男性のことば』に比べ無助詞の出現率がかなり低くなっていた。無助詞になる条件に改まりの度合いが関わっていることを示しているが、本稿では改まりの度合いをそろえて考察することにし、『女性のことば』、『男性のことば』の雑談のみを調査対象とした。
- (7) 項目1は国語研(2004)の中項目、項目2は小数点以下第3位の番号である。用例数の多い中項目に関しては、小数点以下第3位まで分類したが、そこまで分類すると用例数が少なくなる場合は、意味分野が近いと考えたものに関してはまとめて記述した。対象の中の「その他」に分類したのは国語研(2004)には記述されていなかった語である。  
なお、表中のパーセンテージの数値は小数点以下第一位を四捨五入した数値である。
- (8) 20例というのは任意の数字である。
- (9) 本稿においては無助詞名詞の用例全体の出現率 68%を基準とし、78%以上であれば高い、58%以下であれば低いと記述した。これも任意の数字である。
- (10) 国語研(2004)
- (11) 他の意味役割に分類された動詞にもこれらの「ニ」をとりうる動詞が含まれているものがあったが、いずれも数例であり、やはり「2.15作用」に特徴的であるといえる。
- (12) 丹羽(1989)、丸山(1995)等

(13) 【表 2】の他に「外来語」が 2 例のみみられたが、紙幅の都合もあり表には載せなかった。また「和語の複合語」と「漢語」は項目別にするとう用例数が少ないため、パーセンテージを載せなかった。

(14) 荻宿 (2010) でもヲ格の語種・種類別の調査をしているが、荻宿 (2010) とはヲ格の意味役割の分類の仕方を変えている。

#### 【参考文献】

- 浅山佳郎 (1996) 「目的格名詞句の主題化」 神奈川大学人文学研究所『人文学研究所報』29
- 荻宿紀子 (2010) 「動詞の語種・種類別による無助詞名詞句の出現傾向」『日本語学 研究と資料』32
- 黒崎佐仁子 (2003) 「無助詞文の分類と段階性」『早稲田大学日本語教育研究』第 2 号
- 国立国語研究所 (1951) 『現代語の助詞・助動詞一用法と実例一』
- 国立国語研究所 (1997) 『日本語における表層格と深層格の対応関係』
- 国立国語研究所 (2004) 『分類語彙表——増補改訂版』
- 杉本武 (2000) 「無助詞格のタイプについて」『文藝言語研究 言語篇』38 筑波大学 文芸 言語学系
- 杉本武 (2004) 「話しことばにみる無助詞の認可条件」『日本語における話しことばの文法研究』平成 13 年度～平成 15 年度 文部科学省科学研究費補助金 基盤研究 C (2) 研究成果報告書
- 仁田義雄 (1982) 「日本語」寺村秀夫他 (編) 『講座日本語学 10 外国語との対照 I』明治書院
- 丹羽哲也 (1989) 「無助詞格の機能——主題と格と語順——」京都大学国文学会 (編) 『國語國文』58-10
- 益岡隆志・田窪行則 (1992) 『基礎日本語文法—改訂版—』くろしお出版
- 松田謙次郎 (2000) 「東京方言格助詞「を」の使用に関わる言語的諸要因の数量的検証」『国語学』201
- 丸山直子 (1995) 「話しことばにおける無助詞格成分の格」『計量国語学』19-8
- 皆島博 (1993) 「日本語の格助詞「を」の省略について—有生性と定性の関与の可能性—」『言語学論叢特別号』
- 村木新次郎 (1991) 『日本語動詞の諸相』ひつじ書房

付記：本稿は、2009 年 12 月 5 日に行われた早稲田大学日本語学会における口頭発表に基づいたものです。発表の際、多くの方々に貴重なお意見を賜りました。心より感謝申し上げます。

ーかりやど のりこ 早稲田大学大学院教育学研究科博士後期課程ー